

## BKC開設・理工拡充移転を振り返って

日時 二〇〇六年一月十五日(水) 午後五時〜七時

場所 朱雀キャンパス 七階 第四会議室

出席者 川本八郎 大南正瑛 (司会) 坂本和一

事務局(百年史編纂室) 齋藤重 伊藤昇 (総長・理事長室) 縄本敏

はじめに―今日の対談の趣旨について



坂本和一

坂本 本日は、第三次長期計画以降の立命館の改革において最大のスプリング・ボードとなったと考えられますBKC(びわこ・くさつキャンパス)の開設と理工学部の拡充移転を振り返り、これが実現していく経過について、当時のそれぞれのサイドの最高責任者の方々のお話をお伺いしたいと思います。

ご出席いただいておりますのは、ひと方は一九八八、八九年理工学部長で、引続き一九九一年より八年間立命館総長をおつとめになられた大南正瑛先生、

もうひと方は当時常務理事でいらつしやつた川本八郎現立命館理事長です。司会進行は、百年史編纂室長の坂本和一が務めさせていただきます。

BKCが開設され、理工学部が拡充移転を果たしたのは一九九四年四月のことでありました。二〇〇四年四月にはBKC開設一〇周年を盛大に祝いましたことは、まだ記憶に新しいところです。

このBKC開設・理工学部拡充移転の計画があきらかにされたのは、開設に先立つ六年前、一九八九年九月のことでしたが、それは学内外で大きな反響を呼ぶものでした。

学内的には、BKC開設に結実する新キャンパス造営と理工学部の拡充移転の発想は、さらにその三〜四年前から胎動していました。学内では、財政負担の大きな理工学部は戦後ずっと財政的には社会・人文系の大規模学部可依拠する形で成り立ってきており、それが新しい分野の開拓や規模拡大を自己規制、自己抑制するという消極的な循環が続いてきていました。それを断ち切ったのが、理工学部の「財政自立論」であったと思います。

「理工学部だから必ず財政的に自立できない、ということになるのか。理工系の単科大学でもちゃんと自立してやっているところがある。そこでは、どうやっているのか。」この素朴な「問い」が発端であります。この「問い」が発端となり、「学生規模二、五〇〇名を倍増、五、〇〇〇〜六、〇〇〇名にすれば自立してやっというける」という発想が生まれ、ここから、「理工学部の学生規模倍増↓新学科増設↓新キャンパスの必要」という、これまでの立命館大学では考えられなかった新しい発想、いわば「逆転の発想」が生じてきたのであります。一九八〇年代半ばのことでありました。これが、八〇年代後半の「二一世紀の立命館学園構想」（二一

一世紀学園構想委員会答申)の論議に引き継がれ、BKC開設・理工学部拡充移転の実現に結実していくわけです。

このBKC開設・理工学部拡充移転事業は、本学のその後の発展にさまざまな新しい経験を創り出しましたが、その最大のもの、なんといっても、これが地方自治体・滋賀県および草津市との、それまで全国でも例をみない大型の公私協力によって実現したことです。この滋賀県、草津市との大型公私協力は、それ自体の成果と同時に、さらに引き続きAPU開設事業における大分県および別府市との公私協力実現につながる貴重な経験、教訓を作り出してくれました。

BKCへの拡充移転によって本学理工学部は、それまで財政的な自己抑制で実現できなかった教育、研究のハード偏重からハード、ソフト両面を備えた体制への改革と、それに相応しい施設・設備の大刷新を成し遂げることができました。電子情報デザイン学科、マイクロ機械システム工学科、建築都市デザイン学科などの新設は、このような本学理工学部の変革を象徴するものでした。

このBKCの成功は、さらにその後、本学での部門別の財政自立化の志向と規模問題の発想を定着させることにもなりました。これも成果の一つであります。

BKCの開設は、社会的にも大きな反響を呼ぶものでした。

なによりも、九〇年間「京都の大学」として育ってきた立命館大学の歴史に照らして、それは大いに社会を驚かせるものでした。「都市型大学」を標榜してきた立命館大学が郊外の新開地で本当に良好な展望を開けるのかと、当時はあからさまに危惧を表するものも少なからずありました。

また当時、京阪奈の関西文化学術研究都市の開発が大きな話題になっており、「大学移転ならいまや京阪奈ではないか。なぜ滋賀県なのか」といった声も聞かれた時代でした。このような状況のなかでの滋賀県・草津市への移転でしたので、本学関係者には、「京阪奈には負けられない。恥ずかしいことはできない」という気持ちが強くなりました。

六〇数ヘクターという提供される土地の規模と、その広大な土地を滋賀県が私学立命館に無償供与するという新しい公私協力の形をめぐるでも、大いに社会の関心呼びました。

BKCでは、理工学部の拡充移転後、さらに一九九八年四月には第二段の大型プロジェクトとして経済経営二学部の移転・新展開という、全国でも例をみない大規模な学部一挙移転を実現し、これによって学生数は一挙に一二、〇〇〇名に倍増しました。この経済、経営二学部の移転・新展開は、単なる学部移転ということを超えて、理工系と社会系分野の、いわゆる「文理融合」の夢を膨らませる大事業でした。

さらに理工系そのものについていえば、二〇〇四年四月に情報理工学部が新設され、また二〇〇八年度には生命科学部、薬学部二学部の新設が予定されています。

またこの間、BKCは「産官学連携」を中核課題に掲げ、ローム記念館をはじめ、数多くの産官学連携による研究施設を実現し、他にあまり類を見ないテクノコンプレックスを構築してきました。本学がこの間、BKC開設・理工学部拡充移転を契機に展開した産官学連携の立命館モデルとも呼ばれ、社会的にも大きな影響をもたらしました。

しかし、BKC開設・理工学部移転は、立命館大学にとって理工学部と経済学部、経営学部だけの改革、

条件改善に寄与したというものではありませんでした。衣笠キャンパスでは、理工学部との移転と同時に、一九九四年四月、政策科学部の開設を成功させ、衣笠での新たな改革展開の口火を切りました。またBKC開設は、すでに手狭になっていた衣笠キャンパスの教学条件、さまざまな領域の活動条件を大幅に改善することになりました。とくに一九九八年の経済、経営二学部の移転・新展開によって衣笠自身が新展開の条件を獲得することになったのです。

BKCは本学学生たちの課外活動基盤、とくにスポーツ系活動基盤の抜本的な充実にも大きく寄与しました。BKCを活動基盤とするアメリカン・フットボール部や女子陸上競技部駅伝チームがこの間幾度もの全国制覇を果たしたことはその象徴であります。

こうして、BKCは、開設後この一二年間、当初の不安や危惧にもかかわらず、順調な発展、進化を続けて今日に至っています。BKCで生活し、キャンパスをつぶさにみるものには、BKCは本当に日々進化し続けていくことを実感できます。

BKC開設当初、たしかに関係者にこの立地が大学キャンパスとして、とくに学生たちにとって満足度の高いものに育ってくれるかどうか不安がなかったわけではありません。その点で、最大のポイントは、キャンパスを取巻く地域との関係、生活環境の整備でした。この点がキャンパス成功の鍵の一つであることを自覚していたがゆえに、学園関係者は、地域との良好な関係の構築、学生の生活基盤の整備に最大限の努力を集中しました。

一〇年を経過した今日、この点でもBKCは大きな成果を挙げてきていると自負できます。それを象徴す

るのは、南草津駅周辺の変容でしょう。いまは、高層マンション群とファッショナブルなショッピング街に変貌したこの姿を、一〇年前、店らしいものは何もなかったこの地域に誰が想像できたでしょうか。BK Cは立地する草津市の地域振興にも抜群の効果を發揮しているのです。

この二〇年ほど、日本の大都市圏の大学がゆとりあるキャンパスを求めて一度郊外に移転する例が続きましたが、最近はまだ市中に回帰する傾向が強まっています。学生が「都市(まち)」を求める動きに追従せざるを得なくなってきたのでしょうか。

しかし、立命館は、このBK CもAPUも郊外にキャンパスを拓きましたが、大学が自ら「都市(まち)」を創ることによって学生から愛される大学創りを貫いてきています。このような地域振興と結合した大学創造の営為は、必ずや日本の大学の歴史に残るものとなるでしょう。

それでは、このように一九八〇年以降の立命館の大学改革において最大の跳躍台となり、同時に産官学連携や地域との連携をとおして社会的にも大きな貢献を果たしてきたBK Cは、どのようにして構築されたのでしょうか。

本日も出席いただいておりますお二人は、BK C開設・理工学部拡充移転事業を当時それぞれのお立場で、陣頭で指揮を執ってこられた方々でいらっしゃいます。

本日はお二方に、BK C開設に至りますまでに直面したさまざまな課題とその解決の仕方などについて振り返っていただきたいと思えます。本日のお二人は、それぞれ最高意志決定に関わられましたので、とくにこ

れまで文書などで結論的に残されているものを超えた最高責任者としての苦労や決断のようなどころをお聞かせいただけますとうれしく思います。

## イノベーションとしてのBKCC開設



大南正瑛

大南 今おっしゃった点で、学園の発展の歴史的な到達状況とか、国の科  
学技術政策のような背景の要因はあるでしょうけど、私学立命館の理工系、ひ  
いては全学ということになるのですが、教育研究の水準が本当にこのままでい  
いのかという、このままではどうにもならないという、そういうひとつの強い思  
いがありました。あるいは強い希望と言ってもいいかもしれません。だからそ  
ういう点では、BKCC開設と理工学部拡充・移転は立命館のひとつの、大きな  
ルネッサンスであったかもしれませんね。

だからやはり大きな発想の転換があったと思うんです。立命館というのは大変イノベ  
ーティブな大学だとい  
うことは戦後の歴史の中で、社会的に多くの人々が認めてくださっているところがあ  
ったと思うんですが、  
しかし本当に今言ったような点で、このままではどうにもならないな、という思  
いが私個人としてたいへん強かつたですね。これではどうにもならないな、と。

これを支えたのがやはり大学のトップ集団と、学園の構成員との役割分担がそれなりに醸成されていたと

思うんです。役割分担というのはもちろんお互い協力はするんだけど、共有するところはどこかと言うと、やはり今言った夢や志です。トップ集団はそのことを心がけてきた。それをわかるように。少し言い方は適切でないかもしれないけど、夢は大きいほうがよろしいと。しかも単純明快でなければならぬと。やはり皆にわかるようにしなきゃならないと。そうでなければアクションにならないしね。そういった点では標語も必要であったし、「BKC」というのも非常にシンボライズされた言葉だと思う。そういう点で、アンビシャスであるということは元氣が出る源ではないかという感じはします。

今言ったことは、立命館の戦後の歴史の中で築かれてきた教学の理念と断絶するものではないんですよ。ルネッサンスということを言ったのは、やはり今までのイノベーションというのが確かに持続的でありアクティブな面もあったんだけど、それ以上を越えられない一線というのがあった。イノベーションそのものにも。だからそこを何とか越えたいという気持ちたちが非常に強かったです。従って、必ずしも戦後立命館が歩んできた過去の慣習や、或いは既成概念にとらわれる必要はないんじゃないかと。そういう点が非常に特徴的なのだらうと思います。

戦後の立命館学園が歩んだ道というのは、清く正しく行動するということですね。「清く正しく」ね。これは、末川先生のお考えにも繋がるんだけど、そういうことを「全学一致」の原則によって進めようとしたんですね。これが全国的に見ても、立命館の非常にユニークなイノベーションであったと、私は思います。

しかし、一方では、「学内優先」ということが大いに語られ、また学園の規模が中規模の段階で留まらざるを得なかった。立命館は、ある種の閉じた組織であった。立命館は完全には開かれてなかったですね、そう



いう点では。閉じた組織の中で、ゆるやかではあるのですが、私に言わせればイノベーションという冠は付いていたけれども、硬直化していたのではないだろうか。イノベーションそのものが。だから、それを越える道というのは、今、坂本さんが言われた、発想の転換が必要だったのです。

発想の転換ということでは、私は二つの要因が必要だったと思ひ出すんですよ。ひとつは柔軟な発想を持つということ。それと、より開かれた組織にすること。この二つによって、もう少し創造重視の大学にできないだろうかということでした。開かれた組織が重要だということは、発想が柔軟であっても、組織が閉じていたならば、やはり協調性重視になりますよ、どうしたって。協調性重視というのはそれなりに重要ですが、ゆるやかなイノベーションしか生み出せない。立命館は、その段階で留まっていただろうと思う。私はやはりそういう発想の柔軟性と開かれた組織、この二つの軸によって先程言った、クリエイティブなイノベーションをやるうと、かなり思い切ったね。そういう思いを持ちました。

イノベーションであることのひとつの条件というのは、誰も気が付いていないことを発見して、人よりも早く行なうということですね。速度の速さではなくて、とにかく最初のステップを踏み切るということですね。そういうことをやってみたいという気持ちの方が非常に強かったです。

坂本 それは、八〇年代の初めですか？

大南 そうですね。一九七八年、七九年と細野、天野両総長の下で教学部長をやりましたが、ちょうどあのころが変わり目ですからね。ご存知のように、あのころは新学園政策があり、それともうひとつは学園規模問題の議論の皮切りをつくった年ではないかと思うんですね。

それから一〇年後の一九八九年というのは、川本さんが常務になっておられ、坂本さんが教務部長をしておられたという鮮明な記憶があります。そういう状況の中で、一九八九年というのは、私にとっては大きな思い出ですね。なぜかと言うと、ひとつは『二一世紀の立命館学園構想』。あそこで、理工学部の規模問題というのが文書として初めて登場するんです。もちろんそこへいくまでの道程はあるのだけれど、それまでのところでは、公式文書としては謳われなかった。

そんなことで、この一〇年のスパンというのが、私には大変思い入れが強く、一九七九年も重く、また一九八九年も大変重い年で、この一九八九年のときに立て続けにBK C 展開の議論が行われるわけです。これは御存知のように一番最初に始まるのは、二一世紀学園構想委員会答申『二一世紀の立命館学園構想』でしょう。それは、ひとつのプログラムとして文書化されたものでした。

その次が、川本さんにもよく言われたのですが、理工学部でクリアしなければならぬ前提問題があったんです。基礎工学科の廃止問題です。一九八九年度の最後の全学協議会（一九九〇年三月二〇日）で大学の責任でやると決めたんです。この議論をした時、坂本さんは教務部長として、全学協議会の学生諸君とやり合ったときは、心配していつも後についていた……（笑）。

それから、滋賀県からの具体的な新キャンパスの正式提案がありましたね。その前にはもちろん立命館は大車輪で用地探しをやっていたわけですけれども、これも一九八九年ですね。滋賀県より新キャンパスの正式提案を引き出して、理工学部でそれを受け入れるという教授会レベルの決定があり、初めて理事会決議が行なわれます。

## BKC実現の決定的条件

坂本 BKC開設、理工学部拡充をめぐって、理事長から見ますとどんなことを思い出されますか？



川本八郎

川本 大南先生のおっしゃったことはその通りだし、否定することは何もないのですが、私の立場からすると、第三次長期計画やいろんなことが、実際にはそれぞれ具体的な要因から出てきたと思っっているんです。それを整理してみると、大南先生のおっしゃったような概念というか、哲学というかになるんじゃないかと、私は物事というのはいもつと具体的に直接的だと思っんです。

それはどういふことかと言うと、細野先生は、「紛争解決」総長です。細野先生以外の総長では紛争は解決できなかった、はっきり言って。それはあの先生だから解決できたのです。末川先生だったら解決できないと思うんです。末川先生は偉かったけれど。細野先生が偉いのは暴力に対する姿勢が明確であった、そこなんです。細野先生は学園政策の提起は多くなかった、紛争は解決したけど。そういう意味では細野総長の後任に天野総長が誕生したことが正しいんです。私はそう思う。大南先生もそうですけど、私は歴代の総長にずっと仕えてきた。仕えてくると、いいことも、いろいろわかる。

やはりトップは皆、何かしたいのですよ。またさんとあかんのですよ、いや本当に。それで、天野先生が総長になられたとき、「川本君、これから立命館は何をやるのか？」と言われた。

その、「何をやるのか」という問題のひとつは、このまま続けてる学費収入のあり方では限界がくるという

ことだった。これを考えないとあかんと、これがひとつ。もうひとつは、立命館の遅れている点を早急に挽回することだった。遅れている点とは何かと言うと、理工学部と、附属校と、もう一つ語学力。

大南先生には悪いけど、本当に遅れていたのです、理工学部は。僕なんか、職員でいて、理工学部の当時、来たばかりの若い教員が、機会があると他大学にどんどん抜けていくんです。ほんまにくやしい思いをした。それで、毎年赤字でしょう、大きな声でもがいえないわけ、赤字やから。理工の話は学園全体の議論にならない。そういう状況だったんです、正直言って。そういうことから立命館の理工学部は遅れてくるんですよ。そりやそうでしょう、皆が論議させへんのやから。きつい言い方すれば、「お前ら勝手にやっとけ！」ってなもんですから。だから、立命館の理工学部は昔ながらのハード中心で、新しい情報などのソフト系への対応が全然できていなかった。

立命館だけじゃなかったですけどね。要するに、日本中の私学の理工学部が多かれ少なかれそんな状況だった。

附属校も問題だった。日本全国どこの附属校も抱えている問題だけど、とにかく大学にとって望まれる戦力になっていない。親も生徒も、「下手をしても、立命館大学にいける」という、滑り止めの気分が蔓延している。附属校も大学に甘えている。緊張感がない。これはなんとかしないとけない、と。

当時もう一つ問題だったのは、立命館の学生の語学力。立命館というのは語学が弱いというのは当時、評判だった。これを脱皮しないとけない。このためには要するに国際化をやらねばならない。この国際化と、理工の情報化と、附属校問題というのが三つの遅れた分野だった。

それで、天野総長の時に、これらに対する三つの政策を出してもらった。理工学部の情報工学科は、この時、天野先生は大南先生と相談されているはず。大南先生がおそらく理工学部の中核として動いておられたのですから。

私は天野先生と相談して、三つの点を政策化しようと考えた、私は当時総務課長だったから。天野先生は新学部構想については、「人間科学部は、後廻しだ」、「遅れたところに手をつけるんだったら、まず立命館の学生には語学教育の強化が必要だ。要するに国際化が必要なんだから、国際関係学部にしなとだめだ」と明言した。

そんなことで、結局、第三次長期計画として、理工学部の情報化と、国際関係学部と、中高改革・深草移転が出てくるんですよ。これが、理工学部を改革した時の発端だったと思う。

ところが、もうひとつ、理工学部の拡充移転につながることを考えた委員会があった。名前は忘れてしまっただが、理工学部の赤字問題を検討する委員会だったですよ。私は、人一倍理工のことに関心があった。率直に言って、心を痛めていた。何でかと言うと、立命館に就職して、初めて配属されたのが理工学部事務室やからね。それで、その委員会のことが記憶に残っている。

この委員会で、学部規模というのが出てくるんです。そこで、学部規模問題というのは、要するに財政上プラス・マイナスとんとの問題として検討せんとあかんという提起があるんです。この委員会のことを、私は強烈に覚えている。当時理工学部は二、七〇〇名。しかし理工をやるには、最低四、〇〇〇名が必要。しかしそれでは、プラス・マイナスとん。実際には、現在(当時)の倍の五、〇〇〇名が必要。大学院

一、〇〇〇名を入れて、六、〇〇〇名やと。こうなったわけ。そのことが、理工学部の情報工学科をやり、さらに理工学部の大拡充移転につながっていったのではないかと思う。

しかし、理工学部拡充移転といっても、客観的条件がないとできるわけがない。これできたのは、まさに北大路の土地が残ったから。これは決定的だった。北大路を売って校地移転したんやから。あの土地を動かすことができたのが最大の要因ですよ。そこへもってきて、その土地がバブルで七〇億円が二五〇億円まで上ったんです。その時に、「やれ！」ということになったわけです。

二つ目は、寄付金。立命館は寄付金を一般社会から本格的に募集しない、内向きの学校だったんですよ、それまでは。それは末川記念会館の募金状況を見てみたらわかる。

それなのに、なぜそれができたかという、大南先生の奮闘が大きい。大南先生に頼んで、募金のことを校友会にも協力してもらった。

このころ、ある職員OBが私のところに来て、「第三次長計の募金。川本君、あれは、頭、おかしいのところがうか。立命館が企業から金をもらうとは、どういうことや」と。立命館はこれまで「清く正しく」やってきたけれど、企業から金をもらうことは「濁る」ことや、というわけです。しかし私は、あの時、立命館の研究、教育に積極的に協力したいというのであれば、企業であれ誰であれ、協力してもらおうと考えて、取り組んだ。

この点では、立命館は、当時先陣を切ったので、社会的にも、新聞なんか、いろいろ言うものがいたが、今見てみれば勝負はつきりしている。あのとき、「企業からの寄付反対」「産官学協同反対」の声に躊躇し

ていたら、今の理工学部はなかった。いまごろ立命館は潰れている。

だから、そういう意味で私たちは、針のむしろに座ったんです。大南先生には、このとき校友会副会長（一九八七年一〇月〜九一年六月）になってもらい、また評議員会副議長にもなってもらったわけです。

このころ、同志社も関大も関学も、三〇億円の募金計画を立てた。立命館は、三五億円を打出した。結果として、四七億円集めた。これができたから、第五次長計ではさらに六〇億円の目標を立て、実際に六七億円実現できた。

しかし四七億円集めたって、北大路は残せない。深草移転は七二億円ぐらい要ったんやから。深草移転のあとの金はどうしたんや？ あとは、全ての工事についての再点検をやったんですよ。これで約三〇億円確保したんです。それで、七〇億円集めたわけ。したがって、北大路が残ったわけです。残った、そこへバブルがきた「今チャンスや」と、今度は理工学部拡充移転をやった。私の立場からすれば、理工学部拡充移転の問題というのは、いろいろな要素があるけれど、北大路の土地を残したことが、決定的。あれを残せなかったら理工学部の拡充移転は出てこなかった。ところが、それからまた苦労が始まるわけです、バブル崩壊で。そこが運の悪いところ。

工事業者の再点検のことだけど、あの時、立命館の建物、建築物の単価の総額が妥当かどうか、徹底的に調べた。しかし、私も総務財務担当常務に就任して早々のことで、建築契約や、業者との関係は妥当なのか、どうやって調べたらいいのかわからない。これは坪単価を調べたって仕方ない。坪単価はどこからはじめるのかという構造設計が基本であることを知った。それで、京都府庁と京都市役所、同志社と龍大の建物全部

を、何年に何を造ったのか調べた。そして、立命館は何を建てたか、構造設計を全部取寄せて調べた。

問題はあの建物のプラスマイナス・ゼロはどうかということ調べてほしいわけ。しかし建物のプラスマイナス・ゼロを調べるというのは、ガラス、絨毯まで全部調べるんやからほんまたいへんなんや、構造設計だけじゃないから。全部単価を出してこの額は妥当かどうか、プラスマイナス・ゼロを出していく。一週間かかるところを五日で、徹夜でやってもらった。

これをやってもらって、びっくりした。一九七九年に中川会館（衣笠）ができるんやけれども、これが相当高かった。理工の四号館（後の洋洋館）も高かった。これを改善しなければならぬと思った。

### 新キャンパス候補地に滋賀県（BKC）登場

**川本** そこで、次は移転先の問題。計算したら八万坪要するという。京都にできない。それで、校友会会長の廣慶太郎（クボタの会長）さんに相談して、泉南方面を二人して走り回った。しかし、候補地はみな、帯に短し、たすきに長し。条件が合わない。それで結局、南進は断念した。その時に、滋賀県から話があった。

**坂本** それはいつ頃ですか？

**川本** 中川会館に、知事公室長と企画調整課長ら四人ほどの人が来た。一九八九年の夏にかかるころではなかったかと思う。滋賀県にはその前に、龍大が誘致を受けて移っている。龍大が移るか移らないかという決断で迷っていたとき、ある関係者の友人が「川本さん、あんたやったら龍大があっち行っていいかどうか、



どう考える？」と聞いてきたことがある。「土地くれるんやでノ龍大、他にどこにいくねん？他に行くところなかったら行ったらいいに決ってるがなノ何ぐずぐず言うてんねん。私やったら決断するで」という話はある。それで、とにかく南進の努力は空振り三振したけど、立命館が大阪へ足を運んでいることが、今度は滋賀県のニュースになった。

**坂本** 滋賀県が登場したのはそういう動きを察知して？

**川本** 大阪府庁から立命館は南進をしているという情報が入ったらしい。そうしたら、これは運もあるわけ、当時の滋賀県知事稲葉さんは立命館大学の出身だった。明治四年の廃藩置県で滋賀県政というものができて以来、滋賀県の職員から知事になったのは稲葉さんが初めてだった。そうすると、おもしろいもので、歴史上はじめての、おらが親父の知事に県の幹部が燃えた。「おらが親父に土産をつくらう」と。

当時、滋賀県にとっては、龍大だけでは物足りない、もっと大規模なものを、というのが本音だった。そのとき、「立命館が動いている。これはチャンスだ」と思ったらしいです。それで、稲葉知事の命を受けて、県の幹部職員がこられた。そのとき、龍大のときの教訓があつて、七万五千坪と言われた。しかし、断つた。「二倍の面積をお願いしたい」と。それに、場所は限りなく京都に近くで、さらにJRの駅を造ること。その三つを提案したことが記憶にある。

とにかく、私の立場からすれば、理工学部拡充移転の問題というのは、いろいろ要素があるけれど、北大路の土地を残したことが、決定的。あれを残せなかったら理工学部の拡充移転は出来なかったと思う。

## 設置経費をいかに捻出するか

**大南** 理事長のおっしゃったストーリーの中で、大変強い記憶があるのは、設置経費を捻出するために、要するに北大路の資産を売却していかにして目標額として一五〇億を確保するかという問題。バブル崩壊で売却を約束していた予定の業者がギリギリのところまでキャンセルしてきた。完全に相手の信義違反だったけれど。あの状況のなかで、一五〇億の問題をクリアするために知恵を出したというのがすごい。あれがクリアできなかったら、手持ち金と借金だけではできなかったですよ。それは、設置経費の基準があつて、自己資金がなければどうにもならない。設置資金の二分の一を担保するためには、一定の手持ち金と資産売却による収入がないことには……

**川本** 私に言わせたら、ああいうのは相談できない分野なんです。教学問題は皆、オープンにできる。しかし、金銭をどう都合するかというのはオープンにできない。こっちに非がなくても、結果的に、「立命館はなにやってるんや」と言われる。これは、限定された者しか手が出せない。これが厳しい。何で知恵が出たのか言うとはつきりしている。大南株式会社と川本株式会社の話やったら、「話は、やめや/もうバブル崩壊で。もうあかんで」と。しかし、立命館には二万人の学生(当時)と三〇万人近い卒業生がいる。他方、滋賀県議会で決めてるわけ。後に戻れへんわ。ほんまにあの時は、私は一五〇億円出してくれる人いたら目の前で腹切ってもいいと思った。

**大南** あの時に、私が恐ろしいと思ったのは文部省に話がすぐに伝わっていたこと。設置準備室をはじめ

として、廊下でそのことが囁かれていた、「立命館が危ないらしい」と。そのことを聞いて、これは大変だと思った。あの時は本当にもう……

**川本** 私も、あのころのことは、歴史にどう書いたらいいのか、……こつちに非があるわけではないから書いて鬱憤をはらしたらい、スカッとしたい気持ちには、今でもやまやまやけれど、今はまだ難しいね……。あからさまに書けないこと、いっぱいあるんやね。書いたら関係者に傷がつく……。

**大南** お金の問題というのは、人とみんな絡んでくるでしょう、直に。でも、ゼネコンの世界では、こんな、約束を反故にすることくらい、いくらでもあることやと、後で聞かされた。

**坂本** しかし、あの自己資金確保問題は、知恵をしぼって見事にクリアした……。文部省は自己資金でないと、設置経費として認めてくれないからね。

**大南** どうしても資産売却が前提にならないと、通らなかつた。

**川本** その時に、朱雀寮を売った。白雲荘は、校友会会長の廣さんに頼んで、「校友会で買い取ってくれ。いづれ買い戻すから」と。それで、設置経費の一部にした。

**坂本** あのころの設置経費の問題は重たかつたですね。最大のハードルだつたですからからね。

**川本** 私は、ああいう決断をして、BKC開設に突っ走つたけど、BKCも、後のAPUも、刃物の刃の上を走つた立命館の計画やつたなと思う。一步誤つたら、立命館が大怪我をすることになる。他人は、歴史的な事業というけれど、今から思えば、当事者は、歴史的な危険を背負つた事業だつたといえるんじゃないの。しかし、社会的に意味のある事業というのは、実はやつた当事者にはそんなものなのかもしれないね。

**大南** 文部省との関係からいうと、BKCに関してもうひとつの大きなハードルは、設置経費の問題もあったけれど、学生定員問題ですよ、学部規模にかかわる。あの当時、規制が厳しかったから、文部省はすぐに認めないわけですよ。だから立命館としては、仕方なく二段ロケット方式を取らざるを得なかった。しかし、私なりの解釈は、このことによって逆に財政的な算段で立命館としては助かったということもあるんだけれどね。九四年の段階で、一〇学科の構成でどーんと一発でいけたら一番よかったんだけど。文部省の抵抗がきつくて二段ロケットにせざるを得なかった。

### 新キャンパスを求める理工学部改革 — 発想の転換はいかにして浮上したか

**坂本** 話がことの始まりのところにかえりますが、歴史をたどってみて、やはり「理工学部を財政自立」させていくという、この発想と決断が大きかったのではないかと、私は思います。「理工を財政自立させるのだったら、学部規模を倍増しなければならない」、それをやろうとしたら「新キャンパスを求めて、キャンパス移転をやらなければならない」という、この発想の連鎖をやりきったわけですね。そのところの「発想の転換と決断」というのは、今に至っても、ずっと、立命館の学園創造史のなかで、発想の基本として生き続けていると思う。APUだって、その発想の延長でできている。理工学部拡充移転・BKC開設の発想を引き継がなかったら、APUをあゝの規模で成功させることができなかった。またあの規模でなかったら、APUは成功しなかった。これは、私自身が現場を預かったから、実感を持って言える。

**大南** 大南流の言い方をしたら、戦後、立命館は大学としては文・社系学部優位の学問的な伝統で地歩を築いたわけです。だから、戦後本格的に発足した理工学部というのは、我々に言わせたら、立命館大学が総合大学としてやっていくためのネクタイみたいものだったんですよ。金にかかるけれども……。

**坂本** 歴史文書の上で見ると、一九八〇年代前半は、とにかく小ぢんまりといかざるを得ないみたいな雰囲気強いですね。ですから、一九八〇年代半ばに、理工学部を拡充して財政自立させようとの発想の転換、ここのところは経営学、企業戦略論をやっているものには、ものすごくおもしろい。ケース・スタディのテーマになると思う。

**川本** 衣笠一拠点で満足、正直言ったら「金喰い虫の理工学部は邪魔やノ」一九八〇年代はじめはまだ、全学的にそんな雰囲気の時期だったと思う。(〈資料1〉〈資料2〉を参照)

**坂本** 一九八七年に情報工学科を創るでしょう。この情報工学科の設置がでてくるのは、一九八二年の、「新学部・新学科検討委員会」の答申です。ですから、理工学部問題が一九八〇年代前半、まったく無視されていたわけではない。理工についての危機感、関係者には相当強かった。そのなかでなにか手を打たなければということ、情報工学科が浮上してくる。しかし、一九八七年に情報工学科をスタートさせるんですが、そのころすでに、情報工学科ではもう間尺にあわないという感じになっていますね。(〈資料3〉〈資料4〉を参照)

**大南** そうそう、限界を感じてました。

**川本** だけど、なんでもそうだけど、情報工学科を創ろうということになって、学園トップは理工学部に

何かを考え始めてるんだ、と感ずることになった。だからそれで理工学部アレルギーが溶けていくんですよ。

**坂本** その点は大きいと思う。しかし、すぐそれで何か、というのにはならない。

**大南** 理工系の先生方の世界から考えると、財政的な根拠付けを与えてくれたということはある種の安心感を与えてくださったと思う。これは非常に大きかったと思う。立命館は、理工学部みたいな赤字学部をどうするんだ、という雰囲気は歴然としてあった。しかし他方では、これからの立命館は、二一世紀に向けて、やはり、社会系、人文系、理工系のバランスのとれた総合大学として大きく展開しないと、という気持ちも全学的に強かったと思う。これはやはり国の高等教育政策とも関係するわけですし、また社会状況、学問状況とも関わってきます。そうしないと立命館は一皮も二皮も剥けないんじゃないかという認識を、立命館の構成員全体が徐々に感じてくださりつつあった。ある時、細野さんが私に向かって、「大南君、BKCが失敗したら怒るぞ！」とおっしゃったことがありましたね。怒るとはどういうことなのかな、とその時は思いましたけれど、それはそういう雰囲気だったんですよ。

**川本** 正直言って、理工学部移転は誰にも迷惑かけてない。それは、学園財政の甲斐性でやったのです。衣笠の土地を売ってやったわけではない。法学部に我慢しろ、経済学部は泣け、と言って創ったのでもない。どこのパートにも文句言われる筋はない。それは、努力して北大路の土地を残したからできた。理工学部移転は他学部からあれこれ言われる筋は、全然ない。だって、北大路は高等学校として立派な二万五千坪の土地を深草に確保して、移転したんやから。理工学部拡充を決めたんやから、決めた以上は成功させなければならぬと決意した。苦労はしたが歴史的・社会的使命があったから新キャンパスで事業を展開していこう、

というのが僕の考えだったですね。

**坂本** 先に話題になったBKC開設・理工学部拡充移転に向けての「発想の転換」のことなんです。理事長、これ覚えておられますか。一九八七年だから、理事長が常務になられてすぐだと思えますけど、長期計画委員会のもうひとつ前に、基本計画委員会というのがありましたね。上のような発想転換は、私たちが文書の上で今確認できる限りでは、一九八七年のこの基本計画委員会の事務局が作ったサマリーレビューの資料に出てくる。「情報工学科を創ったけれどもこれではもう間尺に合わない」というのが第一。「理工学部を財政的に自立させないといけない」、「そのためには学部規模をだいたい倍増しなければならない」という発想が出てくるわけです。

この発想がどこから出てきたのか。理事長はご存知ですか。当時の川本常務の私的な諮問研究会、「財政研究会」というのをやっていましたでしょう。覚えてますか。学内の比較的財政問題に明るい専門家を何人か集めて、研究会をやっている。教員もいたし、職員の専門家も入っていた。そこで、一番のテーマだったのは理工学部の財政問題だった。そこでの川本常務の問題提起は、「うちの理工学部は万年赤字やけれど、学内はみな当たり前のように思っている、しかし、世の中に理工系の単科大学が存立しているではないか。それらはどうして成り立っているのか。調べてみよう。」それがきっかけになっているんじゃないかと思ってるんですが……。

**川本** 思い出した！理工学部は赤字や、赤字や、とっているけれど、それやったら理工系の単科大学はつぶれてるはずやないか、と。単科大学は生きてるやないか、と。おかしいやないか、調べてみい！と言っ

て研究やらせた記憶がある。

**坂本** この発想は決定的に効いてると思う。そこで出た結果が、理事長の先の発言に反映している。

**大南** それは文章化されてないの？

**坂本** 残念ながら、公式の会議ではないから残されていない。けれど、私が見るところ、その研究会が行われてまもなく、先の基本計画委員会の文書ができたわけです。ここにはその発想が明確に反映しているわけです。急に出てくるんですよ、「理工学部財政自立↓学部規模倍増↑新キャンパス」という三連鎖の発想が。(資料4)を参照)

**大南** そうすると、文書として出てくるのが基本計画委員会の文書？

**坂本** そこに最初に出てくる。公式文書としては、ご存知のように、この発想が明確に謳われますのは、八九年三月二十九日の二一世紀学園構想委員会の答申『二一世紀の立命館学園構想』においてです。全学の人々は皆、理工学部の先生方も一九八九年春の二一世紀学園構想委員会答申が最初だと思ってるでしょう。こちらの方では極めて明解に書いています。しかし、その前奏がありまして、それが当時の常務の研究会。「世の中の理工系単科大学はどうして持ってるんや？」と探らせた歴史がある。これは結構インパクトがあったように思う。その時、芝浦工業大学、東京理科大などを調査分析している。そうすると、やはり学生数五、〇〇〇名は要るということが出てきたわけです。五、〇〇〇名といったら、当時の理工学生数の倍です。それで、これは衣笠キャンパスでは間尺に合わん。やるんやったら、新キャンパスが必要。こういう論理になった。しかし、学内的には、それはたいへん大きな発想の転換が必要だった。このような論議が理事会レベル



では先行していて、これが結局、一九八九年の二一世紀学園構想委員会のところで文章化していくわけです。このへんは、当時私自身が学部長で、構想委員会答申の取りまとめ責任者だったのでよく覚えています。そこでの「発想の転換」の連鎖がずっと効いていきますね。（資料5）を参照）

### 一九八九年九月二日―歴史的な理工学部教授会

**坂本** ところで、大南先生。八九年九月、理工学部教授会では、滋賀県への移転、あれはものすごく短時間の間に決めていきますね。速攻ですよ。その時の状況はどうだったのですか？

**大南** 私は二一世紀構想委員会そのものに、学部長になる前からコミットしてましたし、一九八九年学部長になったときに、すぐにそれをどういう形で実施できるかということ、教授会の中でも並行して、いろんな検討の組織を作って準備したというのは事実です。

**坂本** 理事長。滋賀県移転の話は、相当早いテンポで教授会が決めていますね？

**川本** 大南先生が学部長でしたが、先生が「川本君、教授会三回やらせてくれ」といつてきた。私は、同志社・田辺移転の話聞いていたから、「そんなもの、やればやるほど反対が出る。やればやるほどお釣りがくる。何でかと言うと、電気は電気で文句言う、土木は土木で注文出す。それを聞いて、機械も注文を出す。みるみる予算をオーバーしていく。そして、最後は、それ聞いてくれないなら、できません、ということになる。教授会に延々かけても意味がない。まずは教授会の決断の問題。いろいろなことは決断してからやっ

たらしい」といったのをおぼえています。

**大南** あれは、九月一二日だったです。異例のことでしたが、副総長の真田是先生が状況を心配されて、理工学部の教授会に出席され、最初に挨拶をされたわけです。真田流のスマートな挨拶を最初にやっていたいただきました。私の方は紙芝居をさせてもらって、今度の拡充移転プロジェクトの具体的な提案をしました。あの時非常に意識したことは、常任理事会との関係です。これは事の性格上、常任理事会先行でやらざるを得なかったと思う。しかし、滋賀県との関係があつて、タイミング的に教授会が先行した。正直言つて、必ずそういうことで質問が出てくる。だから最初に言っておかないといけないと思つた。そういう議論の前提だけを最初に何点か言つた。それから、移転によつて水準が下がるようなことは絶対にしないことを強調した。例えば、経費上の問題からもう少し縮小するとかしないとかということがでるであろうが、必ずそれはよくなる方向で考えていると。これは、常任理事会の責任において言えると明言した。

実は、その一週間ほど前に、学部の調査委員会の皆さんに、小型の貸し切りバスをチャーターして、移転予定の現場に連れて行つた。今の正門辺りから入つて予定地を一回見てもらつた。その時に前学部長の菅沼さんもいた。前学部長も一緒に来て欲しいといつてあつた。そうすると、議論が明るくなるからとね。

話が脱線しますけど、近くに滋賀県立美術館があるでしょう。そしてレストランがあるでしょう。あの時は、そこで昼食を食べることにして、参加の皆さんに食事を振舞つた。カレーライスに毛が生えたようなものだったですけど。そして皆さん、やっぱり食事が出て、ゆつくりとコーヒーでも飲んでから行つたわけだから、皆、気分良く見てくれたわけです。そして教授会が始まると、皆さんそれぞれに写真を現像してき

て、それをファイルにして教授会で回覧してくれるわけです。参加した見学者が口々に、どうやったこうやったと言ってくれるわけです。やっぱり食事というのは重要な効果があるなと思った（笑）。それは助かったですね。だから、滋賀県移転の議題は短時間で済んでしまっただけ。

**川本** 他大学の事例を聞くと、こんなことになるかと教授会が延々と議論して、結局決まらないということがあると、よく耳にしていたので、うちではどうなるかと思った。反対するんだったら、対案出せ。一五万坪手に入るんや。JRの駅も作るんや。この案に文句言うのだったら、理工学部の将来を展望して、対案出せ、という心境だった。

**大南** 総長の谷岡先生が心配して総長室で、どうなったかちよつと電話して聞いてみてくれと。これはあとでおっしゃってただけで、電話してくれたわけです。私も、すぐに電話しておかないといけなかったんだけど、議題が山積してたもんですから、すぐに電話しなかった。そうしたら向こうから電話がかかってきて「どうなってる?」「それはもう済んでますよ」って。

**川本** ちよつと心配だったから、実は事前に、中川会館に学科主任を全部集めた。反対するなら反対するで、対案を出してくれと言った。一〇〇年に一回のチャンスや、決断せずはどうするんや、と。大南先生、あの時教授会は何回もやっていないでしょう。

**大南** 一回で決めた。九月一二日。（資料6）を参照

**川本** そうせんとあかんのやて、ああいう大決断は。大決断ほど、短時間でやるのが、要や。やればやるほど、もめる、金が膨らむ。

大南 地域住民からお釣りが出てくるしね。

川本 大南先生が学部長やってたから、よかつたんや、ほんま。まさしく時は人を得た、とそう思う。

坂本 立命館の歴史の上で最高の意思決定やったのところがうかな、あの教授会。だけど、それまでに、場所とはかく、理工学部はもう移転しないとやっていけないという議論を二年間くらいやってきていたでしょう。合意の素地は出来ていたように思う。それで、瞬間的に、滋賀県や、琵琶湖やと言っても、その時はわかりにすうっと乗ってこれたと言うことはあったのかも知れない。

#### 寄付活動と産官学連携

大南 理事長、寄付活動のことでひとつ思い出すのですが、あの時、学祖・西園寺公望を立てて、学園創立九〇周年の募金を卒業生、父母に訴えないといけないということについて、川本さんは当時立場上、評議員会とかいろんな社会関係のことを配慮して苦慮されたのではないか。私は、西園寺の名前を出すということを執行部が決めたわけやから、ちゃんとこの文章を出すべきだと、原稿作っただけですけれども、「大南さん、今の段階では、まだちよつと責任もてん」と慎重だったのを覚えている。「それは決めている。総長もそういう意見だから。そういうことにしなければならぬ。けれど、もう少し機が熟さんと」と。そういうことありませんでした。あの時はまだ、学内でも「学祖・西園寺公望」という觀念が固まり切っていなかったからね。

川本 あの時の私の気持ちは、西園寺のことはもうちよつと熟する形で出していかんと、ということだっ

たと思う。だってそれまで、西園寺は敵やと言ってきたわけでしょう。西園寺は明治維新から昭和まで天皇の一番の側近、昭和の元老だった。国家権力と西園寺は一緒やと、立命内部ではそうなっていたわけ。だから、立命館が西園寺公望を掲げるのなら、西園寺の伝記を責任を持って編纂するくらいのことがないと上滑りする。それで、住友家や、西園寺家の人々の支援を得、明治大学、日本女子大学の協力を得て、要するに外堀を全部埋めて、編纂委員会というのを作って、西園寺の伝記に取り掛かることにした。私の印象では、そういう外枠を配慮しないと、本物の生きた力にならないという考えだった。それで、あの時、あのような慎重な態度をとったのだと思う。

**坂本** 今でこそ誰も彼も、寄付や産官学連携やといっているが、あのころはまだそれが社会的に浮上してくる前で、そんなことを言うと、まだまだ周辺から白い目で見られるところがあったですね。そんなことやったら「大学の自治、学問の自由」はどうなるのか、といつてね。またあのころ、ちょうど社会ではリクルート事件があったりして。しかし、立命館は寄付活動や産官学連携を、正々堂々とやったことで社会的理解を得られたという気持ちですね。こそそやってるんじゃないやなくてね。企業も積極的に社会への役立ち、教育研究への貢献を求めているのであれば、大学はこれと積極的に協力し、共同で社会に貢献したらよい。わかりやすくいえばそういう論理だったと思う。この時に、私たちは独自の自主・民主・公開・平和利用を原則とする「学外交流倫理基準」も創ったしね。だから、立命館としては非常に正々堂々と、いわゆる「産学協同反対」とか言うのに対して、切り結んだ。この転換は大きかったと思う。

「リエゾン・オフィス」なんて、立命館が創った言葉なのに。当時の通産省が、このコンセプトをある産

官学連携の会議文書で使ったのがきっかけで、社会的に一般化し、今はもう国立大学みんな使ってるけどね。立命館が特許とつてもいいぐらい。あの時に通産省が、立命館の産学官連携をずいぶん高く、好意的に評価してくれましたからね。それで、産学官連携の「立命館モデル」ということがいわれるようになった。

### 霞ヶ関との関係強化

**大南** 通産省でも、文部省でも、定常的な関係を作ろうということで、人脈をつくるのに随分力を入れましたね。

**坂本** しかし、国際関係学部創設のころはまだ、理事長、随分苦労されたのではないですか。

**川本** 設置委員会の者が文部省へ何回行っても玄関払いなんです。国際関係学部設置の事前相談ができなかった。どうにもならないから、いろいろと何か他にないかと考えた。その時、中央教育審議会会長が元京都大学総長の岡本道雄先生だった。岡本先生とは懇意だったんで、先生のところに行って、なんとかならぬかと頼んだ。そうしたら、岡本先生、「わかった。私と一緒に文部大臣、事務次官、高等教育長、私学部長のところを回ろう」と言ってくださった。それで、私は生まれて初めて政府の公用車に乗せてもらって、岡本先生と一緒に文部省へ行った。岡本先生はおもしろい人で、大臣と事務次官に会ったときに、「誤解せんといってくれ」と言うんや。「その辺の政治家と一緒にするなよ」と。「立命館がこの学部を創ることは意味のあることやから、協力してやってくれ」と。それでいっぺんに窓口が開いたわけです。

それまで、どう言われたか。「お前ら頭狂ったのちがうんか」とか、「高等教育抑制政策の下で京都に新しい学部とはどういうことや」とか、散々いわれた。また京都は京都で、観光道路の南は、法律上、工場等制限区域であかんわけ。衣笠の氷室グラウンドがどうかとなれば、あそこはあそこで、地域住民と建物を建てないという念書が入っている。町内会が「約束違反や」と言う。立命館はどっちを向いても難問だらけだった。四面楚歌、あの時はそんな状況だった。それで、調査室長の戸木田先生が、「衣笠山の中にトンネルを掘って、原谷でやろう」と言い出したりして。

**坂本** そんな案もありましたね。

**川本** 計算までしていた。一〇億五〇〇〇万円だったと思う。

**坂本** いろんなことを考えた記憶がありますね。

**川本** 氷室グラウンドは建物が建てられない。地域住民がうんと言わん。だから、どないしようか、と思案した。それで、市会議員の（故）木俣先生と相談させていただいて北区、右京区選出の、自民党、公明党、民社党、社会党、共産党の各党の市会議員全員と、谷岡総長ともども、今川市長のところをお願いに行った。今川さんは一寸皮肉も言われたけれど、特別に協力をしていただいた。それで、あそこに国際関係学部ができたわけですよ。

## 改革のエネルギーはどこから来たのか

川本 今、思うのだけど、大南先生、何でこんなエネルギーが出たのだろうか、理屈では説明できないね。死ぬような思いをして毎晩、毎晩、夜中まで議論して、折衝して。何でこの三次長計、四次長計、五次長計で、こんなエネルギーが出たんやろか。

大南 やっぱりパッションがあつたからエネルギーが出たと思うよ。イノベーションへのパッションです  
ね。

坂本 APUの時のことを思えば、やることに惚れたというのがあるんじゃないかな。

大南 人に言われてできるもんじゃないんですか。僕なんか、ようせんわ、人に言われたからといって。だから、冒頭で言ったように、「このままではどうにもならん」という思いから、「これはこうしたい」という、やっぱり「したい」という思いですよ。それが元気の源泉やと思うな。

川本 私なんか自分の母校だからな。私が他大学の卒業生やったら、これだけ命懸けられへんな。坂本先生なんか、立命館出身者じゃないのにここまでやるというのは、すごい。立命館の運は、この様な人達が多くおられたことだと思う。

坂本 やってきた仕事というものに惚れ込んだことがあるんじゃないですかね。BKC移転でも、APUでも。しかし現実的な状況として、僕らは理事長から発破を掛けられて、「岸を離れた船が戻れるか」という一言でやってきたようなところもないとは言えないからね。理事長も多分、その思いは同じだったんじゃない



ないかと思う。「漕ぎ出した船が、帰れるか」と。とにかく、何が何でも向こうへ行こう」と。BKCでも似たようなことであって、あそこまできて、資金捻出問題で業者の不誠実でいろいろ苦しい局面もあったけれど、とにかく漕ぎつかなかければならなかったからね。

それと、やっぱり、産官学連携にしろ、APUのアドバイザリ・コミッティにしろ、社会的約束というのはものすごく重いものがあつた。あの信義、信頼の関係は絶対に崩せない、と思った。「何としてでもやらなければならぬ」と。

川本 やる！と言ったときは、おもしろいからやる、というところもあるんだと思う。しかし、決断した後は、責任感やな。

大南 そら、責任感やね。

坂本 BKCだって滋賀県とのあの大型約束を途中でばしやられへん。日々、土地の開発が進んでいるんやから。

大南 企業もそうだろうと思うけど、学校というのは、特に公器ですよ。公の器であつて、やっぱり社会的責務は重いですよ。

川本 私が何でそんなこと言い出したかと言うと、私の実感では、立命館がこの間、三次長計、四次長計、五次長計でやってきたこと、これは他の大学には真似ができないと思う。この他人の真似のできんことのできたというエネルギーは、何やったんやということ。

坂本 あんな大型のプロジェクトを、しかも立て続けに、しがみ付いてでもやり抜こうとしたエネルギー

はどこから出たんや、と言うことですが、やっぱり社会的な約束が重たかったのどちがうのか、というのが私の思いです。だって、滋賀県があれだけの土地を無償提供してるわけでしょう、自然を開発してるわけでしょう。これは、立命館、ほしやられへん、というのが両トップの思いやったんやないかと、今でも思っています。APUの場合も、あの熱気の中でのあの約束、「ちよつとできませんでした」なんて絶対に言えなかった。本当に、「石にしがみついても」……という気持ちだった。

**大南** だから、諦めることができなかった。ギブアップするわけにはいかなかった。

**坂本** だから社会関係を結んだというのが大きかったと思う。

**大南** それも開かれた組織にしたというのが大きいですね。そこから、社会的責務が出てくる。

**坂本** 私なんか、APUでもBKC新展開でも、あの構想とか考え方に惚れこんだところがあるな、はっきり言って。「この構想はやるぞ」っていう。それは、かなりその個人の内面的なものになるけどね。「これは歴史的にやる値打ちあるぞ」とかね。この点は、言わず語らず、どうです？大南先生、川本理事長はもっと強かったんじゃないですか。

**大南** やっぱり昔から言うんじゃないの、その立場が意識を変えろとね。そういう意味から言うと、その「人」と置かれた「場所」ですよ。

**川本** BKCで言うと、京阪奈学園都市問題。あのころ関西は、京阪奈開発で沸いていた。教育研究・文化の関係者は、みな京阪奈に向いていた。「二一世紀は京阪奈や」と。しかし、立命館は京阪奈と離れたところに行くことになった。それで、僕は、滋賀県に行く以上、ケチなことしたら、やられる、笑われる、と思っ

た。しこしこやってたら、同志社や阪大、京大にやられる。立命館の理工学部は、移転してやる以上は、大々的にやらんとあかんと思った。そうしたら、それで新しい価値がつく。そうせん限りは、京阪奈にやられると思った。しかし同時に、京阪奈は馬鹿にしたらあかん。だからあすこにも足場を持つとうと思った。それであそこに、研究室をリースした。万一の場合に、立命館もおりますよ、といえるように。BKCに行っても、立命館は、京阪奈とも仲良くしますよ、ということを示しておかなあかんと思ってね。

**大南** 確かあのころ、不動産屋が立命館にも京阪奈周辺の土地の話を持ち込んできていた。しかし、なにしろ高すぎた。そんなものに立命館が手を出せるわけがなかった。

**川本** ひとつは、生駒山にも候補地があった。私、見に行った。アクセス整備に一五年かかると。間に合わん、時間的に。それと土地が上り始めていた。それでやめた。

**坂本** あのころ、確かに京阪奈志向というのは気になったね。

**川本** 二一世紀は京阪奈や、とね。関東は筑波学園都市や、関西は京阪奈学研都市や、と。  
**坂本** 関西経済界もそっちに動いてたしね。あの時の雰囲気は、今とは全然違うね。

**川本** これに対して、立命館は滋賀県草津市や。野路や。それは必死にならざるをえなかった。京阪奈なんかには負けられるかという思いが強かったね。

**坂本** それでは予定の時間もきましたので、だいたいこんなところで切らせていただきます。お二人お揃いでこういうお話をお伺いすることはなかなかありませんので、貴重な記録ができると思います。

**川本** 立命館はそれなりに、その時、その時の課題と目的に沿った的確な人を得てきたと思うよ。

大南 それは言えてるな。やっぱり気が合った仲間でない、仕事できない。

川本 総長が、「川本さん、君はそう言うけど、僕は気が進まんのや」と言われたら、僕エネルギー出なくなる。「川本さん言うのやったら、よし、いきましょう」となったら、さらに元気が出る。そういう面はあると思う。

大南 それはある。確かに。そういう点では私は、立命館に対して感謝、感謝。今日も、ありがとうございます。

坂本 今日はお忙しいお二方、どうもありがとうございました。

#### 〈資料1〉

「第三次長期計画に関する答申」〔基本課題Ⅰ…八〇年代およびそれ以降（衣笠一拠点計画完成後）における本学の長期的かつ総合的發展、特に本学が果たすべき社会的役割を視野に入れた学園規模（学部、学生数、教職員数等）について〕（一九八〇・八一年度長期計画委員会…一九八二年三月三一日）

#### （前略）

#### 5. 検討課題としての新学部・学科および学部規模

以上の検討をへて、学園規模問題の具体的施策にかんし、とくにつぎの諸点を提起することができる。

① 学部・学科の現状と課題、学問の動向、社会的要請、大学の力量・条件を考慮に入れたばあい、検討

すべき新学部ないし新学科として、たとえばつぎのような分野があげられよう。

- a 国際化時代に対応して、外国文化、外国語ないし国際関係論等を内容とする学部あるいは学科
- b 現代社会・文化の高度・複雑化した構造との関連で地域や人間のあり方を問いかえすものとして、国民的関心の的となりつつある、教育ないしは広く発達の問題を取りあつかう学部あるいは学科

② 理工学部 of 規模

理工学部においては、学部学生数減の計画の進行とあわせて、現代科学、技術の高度化および社会的要請に即した大学院学生数の増加をはかるべきである。

(以下略)

〈資料2〉

「学園の長期計画に関する答申」

第三部 理工学部の教学基本施設ならびに社会科学・文系教員研究施設（新研究室棟）の整備について（一九八三年度長期計画委員会…一九八三年三月三十一日）

(前略)

2. 八〇年代およびそれ以降の学園創造と理工学部教学のめざすもの

① 社会に対する科学技術の役割が今後益々影響力を高めるなかで、総合大学としての社会的評価を得るためにも理工学部比重が重視される時代になってきている。一九七〇年代後半からの低成長期に入らななで、社会が理工学部を求めるのは、つねに新しい科学技術の先端にとどく研究と教育であり、創造力豊かな質の高い学生を送りだすことにある。

② 本学理工学部が設立当時と変わらない学科編成のまま推移したことは、他大学に比べて相当に立ちおくれた面をもっていることを率直に認めざるをえない。それは六〇年代前半の時期に学科再編・新設を実施しえなかつたことによる新しい学問分野に関する教科のとり込みの不十分さなどにあらわれている。さらに、基本的な研究設備（大型機器）、電算機導入時期などの面でも他大学と比較して相当なおくれがあつたことも指摘できよう。今は、本学理工学部にとっては、過去のこれらの立ちおくれを早急に回復し、さらに将来の発展を期する展望を切り開くべく積極的な政策を確立すべき重要な時期であるといえよう。具体的にどの分野を充実すべきかについては、科学技術の発展の動向、社会的ニーズ等を見極めたいうで充分検討すべきであるが、少なくとも情報処理に関連する分野については、理工学部のみならず、社会科学系学部の教育のなかにもとり入れる必要があることから強化が計られる必要がある。また、数学専攻の大学院前期課程の設置も将来的な展望のもとで具体化を計る必要がある。

### 3. 今後における理工学部教学基本施設整備の方向と具体的計画

衣笠一拠点化のなかで、相対的にたちおかれている理工学部の研究・実験施設条件の早期整備を将来的には次の方向を目指しつつ実現していくことが必要であろう。

① 各学科の教育研究基本施設は基本的には独立したものを構想しながらも、共同利用研究施設の設置を含めた理工学研究所等の整備を計る必要があること。

② 学都規模の適正化と社会的ニーズからみた学科の再編、新設を展望し、それにつながる研究・教育施設の整備を視野におくこと。

(1) 理工学部教学基本施設に関する当面の課題

以上のような長期的展望にもとづく将来計画を基本的に視野におきつつ、施設整備に関する当面の課題は次の通りである。

(イ) 電気工学科の拡張

電気工学科の教育・研究施設である現四号館(約一、六〇〇<sup>2</sup>m<sup>2</sup>)は、他の学科の施設条件と比して狭く、また他大学の電気工学科の施設規模、将来の構想案を考えるならば、少くとも二、五〇〇<sup>2</sup>m<sup>2</sup>程度の新しい電気工学科棟を必要としている。

(以下略)

## 〈資料3〉

「新学部・新学科問題に関する答申」(新学部・新学科問題特別委員会：一九八三年三月二五日)

## (前略)

(6) 理工学部における新学科構想と研究・教育体制上の課題

① 理工学部在一九八六年度ないし八七年度新設を処として電子工学科の設置を検討するが、これは、前述のように最近の電子工学の発展、それにとまなう社会的要請を背景とし、理工学部における研究・教育体制の充実のみならず、全学的な情報科学関連の研究・教育体制の強化に資するという判断に基づいている。(電子工学科の構想については、以下5において詳述する。)

② 今日の科学・技術の全般的な進展と諸課題に対応していくためには、電子工学科の増設にとどまらず、既存各学科を基礎とする別個の新学科構想や課程分離なども今後の検討課題とならう。

③ もちろん、理工学部における当面する研究・教育体制上の課題は、新学科設置の問題にとどまるわけではない。

長年の懸案とされてきた理工学部学生定数の削減計画は、全学的にみて相対的に早期に実現される必要があり、そのさい、学部教学の改善・充実とあわせて最近の科学・技術の発展にとまなう社会的要請に即した大学院の拡充、とりわけ「修士課程」の増員などがさらに計画的にすすめられるべきであろう。

④ 以上の諸課題をすすめるために、既存各学科および新学科の教学条件、施設・設備について、総合的



な観点から整備していく必要がある。

(以下略)

〈資料4〉

「立命館学園二一世紀戦略構想(案)」(一九八七年九月七日 調査広報室)

\*この報告は、一九八七年度基本計画委員会の事務局が秋の検討作業の検討骨子として、理事会サマー・レビュー用にまとめたものである。

## 1. 経緯

「1」八三年学園基本計画要綱の実施経緯と現段階

(中略)

② 八三年第三長計実施開始段階における学園課題の設定

(1) 八三年以来、本学は国際化、情報化、開放化を軸に教学刷新をすすめる、これをささげる財政政策、人事政策をこころみてきた。①理工学部情報学科の設置、②国際関係学部の設置、③学部教学の刷新、④二部改革、⑤事務機械化、⑥高中移転を転機とした高中政策の積極的な展開、⑦積極的な財政政策の展開である。この中で、教学改革および財政政策の両面での前進はこれまでの本学の歴史過程から

みれば、顕著なものである。しかし、情報・国際関係の新設を含む本学の教学刷新は実施に入ったばかりであり、研究政策は立案段階にとどまり、また、事務体制の改革政策もその基本方向を模索する域をでていない。さらに今後の学園政策をささえうる財政基盤は、本学の歴史経緯もあって、他の主要私立大学の水準に到達していない。

(2) 以上の①から⑦までの課題について、誤解を恐れずに、端的にコメントするならば次のとおりである。

① 情報工学科の新設は、理工学部全体の刷新に結びつかず、また、現在の科学技術政策領域の動向および理工系大学の改革情勢から見て、本学の理工学部の改革のおくれが明らかである。

② 国際関係学部については、この学部が八八〜九一年に成功裡に運営され、社会的にその存在が定着するための課題と諸事業が少なくとも全学的には不明確である。

(中略)

## 2. 現状の規模の分析

(中略)

① 以上から、一部総学生数(一〜四回生)は、九二〜九三年の一八、〇〇〇台をピークにして、九五〜九六年(臨時定員の効果がなくなる)の一七、〇〇〇前後、そして、二〇〇〇年時の一五、四〇〇になり、現状の学部構成を前提とすれば、現在の総学生規模(五回生をふくめて一六、〇〇〇台)に実数で

戻ると想定できる。なお、二部学生数（八七年現在で、二、九四六）を八八年以降に二、五〇〇〜二、〇〇〇と想定するならば、総学生数は九二年時の二〇、〇〇〇名をピークに、二〇〇〇年時に一八、〇〇〇名となると予測しうる。

② （中略）

③ 私大財政構造としては、一部学生数を基礎と考えるべきであって、この場合に、他私大に対抗しうる財政政策の見地からは一部学生数一九、〇〇〇名（二部二、〇〇〇名と想定）を確保する必要がある。したがって、九五年〜二〇〇〇年までに四、〇〇〇〜五、〇〇〇名のあらたな定数の獲得と条件整備が必要。

3. 上記分析にたつての学部政策

（中略）

③ 理工学部については、一方における今後の科学技術政策分野における社会的要請の強まりと、他方における本学理工学部の規模・水準を直視した、全学科におよぶ抜本的な再編・改革が必要となる。

この場合、短期的には、すでに提起されている①大学院の大幅増員、②助手問題の解決、③二部基礎工学の廃止を早急に実現し、中期的な課題として、理工学部六年制（学部・修士一貫制）を軸にして、今後の社会的要請に応じた抜本的改革を全学的な努力によって実施する。

④ 以上の政策実施は、当然にキャンパス問題の再検討を前提とし、課題に応じた新たな校地取得の先行

的实施をおこなう。

#### 4. 財政政策からみた本学の学園課題

(中略)

##### ②部門別関係

・理工学部―適正規模を策定し、これに見合う学部改革の政策の確立。

(中略)

#### 〈資料5〉

「二一世紀の立命館学園構想〔二一世紀学園構想委員会答申〕」(一九八九年三月二十九日 二一世紀学園構想委員会)

#### 4. 理工学部の拡充

(中略)

本理工学部は一九八七年の情報工学科新設まで、一九四九年の新制学制以来大きな改組・拡充がなく、六〇年代以降の理工系ブームに乗って拡張した他大学に比べて小規模にとどまり、学園構成における自然科学系の比重も著しく低下してきた。また大学院についても、全国的傾向である修士課程を拡充する方向に立ち

遅れた。理工系の拡充は本来的に財政基盤の弱い私立大学にとつては困難な課題であるが、今後の科学・技術の発展と大学の社会的立場から、本学が総合大学として発展していくためには放置しえない分野であり、それだけに計画的取組みが求められる。小規模の理工学部は財政的には逆に自立を困難にし、財政的困難がまた拡充を妨げるという悪循環をもたらす。したがって、今日の急速な科学技術の発展に即応し、それをリードするような理工学部をつくるためには、むしろ規模を拡大し、すくなくとも経常勘定においては自立できる条件をつくる必要がある。

(中略)

## 5. 学園規模と新キャンパス構想

(中略)

### ③ 学園キャンパスの域外への展開

一八年余にわたってつづけられ、一九八一年に完遂した衣笠一拠点政策は、本学の総合大学としての総合的力量を高め、学部をこえた教学改革の前進、財政の効率的運用など、学園創造の新しい段階を築くことに成功した。しかしながら一四万㎡という絶対的狭隘さ、「工場等制限地域」にあり、また風致地区にあるための厳しい制約は、これまでのべてきた積極的な二一世紀学園構想の実現にとつて重大な制限となっている。一拠点の到達点にたつて、都市型大学として京都、衣笠をメインキャンパスとして人文・社会系学部の拡充をはかる一方、関西地域のリサーチコンプレックス構想と有機的に結んだ新キャンパスを確保して理工学部

系学部の展開をすすめることを検討する。

理工学部移転後の衣笠キャンパスには設置基準上は七〇〇名規模の社系学部が二つ設置できる。「工場等制限地域」には定員増を伴う学部増設を認めないとの「新高等教育計画」における文部省方針は、九二年以降もそれが大幅に緩和されるとの見通しはなく、衣笠キャンパスでの新学部の設置と定員増は困難が予想される。しかし、衣笠キャンパスから減少する理工学部の五七〇人分についてはこれまでの他大学の動向からしても認められる可能性が高く、また18歳人口は都市部での比率があがり、機械的な制限には困難さが予想される情勢にあることから、臨時定員、二部定員の活用など、実質的な増員につながる方策については可能性がある。一々二学部設置した後も衣笠キャンパスは現在よりはるかにゆとりのあるものになるう。

(以下略)

〈資料6〉

「理工学部六〇年の変遷―理工学部 びわこ・くさつキャンパスでの新展開」『立命館大学理工学部六十年の歴史を拓く』

(一九九九年三月三十一日…理工学部教授 児島 孝之)

(中略)

理工学部の新キャンパスへの移転は一九八九・九・一二教授会で承認されている。議事録によれば、議題に先立ち、真田是副学長が提案に至る経緯の説明と学部での積極的な論議を要請する挨拶があった。学部長から①第二キャンパス設定の必要性、②理工学部の第二キャンパスへの移転、③「公私協力方式」、④第二キャンパス選定基準、⑤滋賀県「びわこ文化公園都市」、⑥常任理事会の取り組み、⑦常任理事会は全学の協力を得て理工学部の拡充発展に努力すること、等について説明があった。種々議論の後、学部長から①議題の性格上常任理事会の責任で取り組んできたこと、②八つの候補地を検討した結果、提案の候補地が最適であること、③新キャンパスのイメージづくりの課題の重要性と全学的協力の必要性、④施設・設備の充実にについては、現在の本学理工学部の到達点以上の水準を確保すること、等の表明があった後、第二キャンパス設定地および理工学部の第二キャンパスへの移転を承認した。当日学園上層部では教授会での長時間の議論を予想され、紛糾を心配されていたらしく、会議室まで見に来られたが会議は既に終わっていたというエピソードも残っている。

(以下略)